

アペックス産業株式会社訪問記

訪問者

(公社) 東京都ベストコントロール協会 副会長 泉 敏夫
総務委員長 坂上 茂雄

今回の会員訪問は、西郷南洲と勝海舟が江戸開城で話し合った薩摩蔵屋敷(現在、三菱自動車本社)からほど近い、薩摩藩上屋敷があった東京都港区芝2-23-4に所在するアペックス産業株式会社。社長の元木貢さんは、長年、本協会の理事・副会長としてお力添えをいただいております。去る平成29年の春の叙勲で旭日双光章を受賞されています。会社は昭和24年の設立で本年12月に70周年を迎えられます。



(泉) 近くまで来ていたのですが、道に迷ってしまい遅れて申し訳ありませんでした(汗を拭きながら)。会員訪問シリーズは今回で10回目となります。御社は創業70周年とお聞きしています。おめでとうございます。元木社長が2歳の時に設立されたわけですね。70周年を迎えるまでに創業者が全国協会の設立に向けて奔走されたり、元木社長が国内外の業界や国のために大変なご尽力をいただいたとお聞きしています。戦後のベビーブーム、成長期、発展期、成

熟期とさまざまな時代の変化の中で生きてきて来られ、また、学術的にも熱心な元木社長がどんな気持ちで会社に入り、どんな気持ちで後継されたのか、現在のPCO業界や協会の課題、将来像、そして東京オリンピック・パラリンピックへの想いも聞かせてください。

(元木) では最初に創業者・元木三喜男の会社設立までの経緯をお話しします。創業者は東京高等商船学校(現海洋大学)を卒業後、戦争中は海軍大尉として潜水艦の航海長をしていました。魚雷を受け、呉の軍港で修理中に原爆に遭いました。翌日、爆心地を歩いたと聞いています。原爆病にもならず91歳まで生きました。終戦後は英語を活かして一時期進駐軍の通訳をやっていました。その時に米軍の昆虫学者のMr. Morrill(モリル氏)と運命的な出会いをしています。その後、国際衛生の三林社長に



請われて燻蒸のお手伝いをして、三林社長のご厚意とモリル氏の後押しで昭和24年にアベックス燻蒸株式会社を設立したわけです。

(坂上) 元木社長はどのようにして会社に入ったのですか。

(元木) 大学に入って生意気に車に乗ってましたので、沼津や高崎のドライブインのゴキブリの駆除を手伝ってました。会社はまだ幼稚でしたが、PCO業界はこれから面白いな、いろんなことができそうだと魅力を感じていました。もともとじっと机の上で仕事をするよりも動くのが好きだったということもあります。大学4年のときにアベックスに入ると父に言いました。父は喜んでくれて、私は商学部でしたので昆虫の勉強に留学したらどうかということで、モリル氏に相談したところ、日本に立派な先生がいると、当時東京大学伝染病研究所(現医科学研究所)の佐々学先生を紹介していただきました。佐々先生は日本の衛生動物の創始者で、マラリアやフィラリア、ツツガムシ病、日本脳炎など日本の風土病を一掃された学者です。昭和天皇に講書始の儀でご進講もされています。

佐々先生は「衛生動物の研究はいろいろな分野の人が協力してできる、商学部は初めてだ」と大変喜んでくださって、「PCOの仕事はこれから発展するから頑張りなさい」と言って研究生にしてくださいました。

その年の夏休みに、岡山で日本脳炎媒介蚊の研究をしているのでアルバイ

トで来ないかと誘われました。初めは蚊とユスリカを分けることに苦労しました。それができると、蚊を種類分けしました。慣れてくると実体顕微鏡を使って、コガタアカイエカと頭頂部に白い剛毛がある亜種のシロハシエカを分けました。そのうち飛んでいても肉眼で見わけがつくようになりました。そのころは目が良かったんですね。教え方が上手で、私を戦力として使ってくれました。この経験は後でとても参考になりました。

研究室には半年ぐらい行っていました。佐々先生はスポーツ万能で、教室の横にコートを作って朝から晩までバドミントンをしていました。後で分かったのですが、研究者の方々は実験や観察の合間に代わるがわるプレーして遅くまで研究をされていたんです。

(坂上) どんなことを勉強されましたか？

(元木) 「論文を書かなければやらないのと同じ」ということで、先生は1000編を超える論文を書かれています。あとノミネーションで人脈づくりでしょうか。人手不足で半年で会社に戻りましたが、夜な夜な出かけては先生方と飲んでました。そのお仲間がみんな偉くなって人脈となっています

(泉) 佐々先生とPCOとのつながりではどんなことがありましたか？

(元木) そのころ創業者は日本PCO協会の初代会長でした。米国のPCO協会(現NPMA)のサービスマニュアルを翻訳して日本語版を作ることになりました。佐々先生が故田中生男先生はじめ

数人と私も入って熱海の保養所で合宿して分担して翻訳しました。終わって私たちが街に繰り出して帰ってみると先生がすべて校正してすでに完成していました。これが最初の従事者研修テキストとなりました。その後先生をはじめ、緒方一喜先生、田中先生はじめ多くの先生がペストロジー学会を作ったり、建築物衛生法にIPMを導入したり、各種講習会で講師をお願いしたりと、学会とPCOとのパイプ役となりました。

(泉) 二代にわたってPCO協会に尽くした訳ですね。

(元木) 自分の会社だけではできないことを業界の活動で作って、それを会社で実践するというのが本音ですので、ボランティアだけとは思っていません。でも銀行から役員を招いたのですが、その人には分かってもらえませんでした。「今の数字を作るのが経営者の役目、社長は会社の仕事をほとんどしていない」と言われました。

(泉) 確かに銀行はお金だけでしたね。私も賞与資金を借りに銀行に行きましたが、売上を上げなさいばかりでした。銀行は「雨が降ったら傘を取り上げて、晴れたら傘を貸す」でした(笑い)

(坂上) どんなご苦労がありましたか？

(元木) まず火災に遭ったことでしょうか。平成2年1月31日でしたが、そのころ相前後して台一環境さん、東京三洋さんと火事が続きました。借家でしたから備品に1千万円かけていまして、5百万円儲かって、これが焼け太りかと思い

ましたら、大家さんが満足な火災保険に入っていないくて、借家人は現状修復の義務があるからと儲かった五百万円を取られてしまいました。(笑い)

たまたま事務所を移る計画があり設計図もできていたので、社員に我慢してもらって、すべて出来上がってから入居しました。コンセプトは、業務社員には個人用の机を入れない、無線電話を置いてどこからでもかけられる、机の上はすべて片づけて個人ロッカーに入れて帰る、というルールを作りました。これは今でも守られています。

その後ビルを建てて新卒採用を始めました。それまでは、プレハブ2階のあばら屋でしたから、応募者は会社の前まで来て帰ってしまう。(笑い)

(泉) 今、人手不足はどうですか？

(元木) 幸い人手不足はありません。2年に1度新卒を採用しています。本年もナビサイトと合同説明会を行います。一昨年の実績では、合同説明会で43名にスライドで仕事の説明、その後14名に会社で会社内容を説明し全員が試験を受け、6名と面接、3名に内定を出しました。女子1名が辞退しましたが、2名が入社し元気で仕事をしています。2人とも虫が好きなんです。環境に関わり、社会貢献ができるという結構、反響があります。

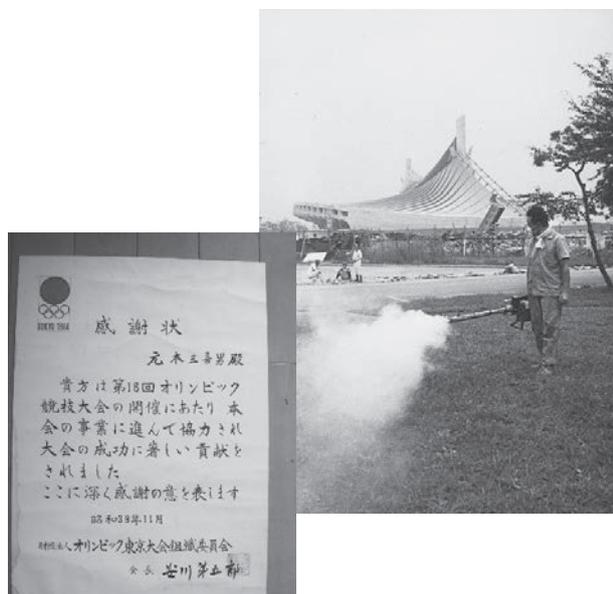
(泉) うちでも数多くの大学からも採用していますが、一人前になるまで大変。まず運転ができないし、読まないし。

(元木) 高卒と大卒の境がなくなった感じはありますね。PCO業界では採用は難し

いと言っているけど、環境に貢献するし、やりがいがある。職場環境を整備していけば、この業界は魅力のある業界と言えると思います。

(坂上) 来年東京オリンピック・パラリンピックがありますが、前回のオリンピックの時はどうでしたか。

(元木) 壁に前回のオリンピックの時の感謝状がかかっていますが、当時あった東京都殺虫消毒同業協会が東京都環境衛生協会から受注して選手村宿舎とオリンピック会場の殺虫消毒を薬剤の全面散布と煙霧で行ったと聞いています。北京オリンピックも同じようでしたね。今は日本の環境がよくなって建築物衛生法の維持管理マニュアルや国交省の建築保全業務共通仕様書のとおりやれば問題なくなりました。ただ、感染症対策は別です。オリンピック施設のサーベイランスを前年から行うとか、秋に成虫の駆除をして越冬卵を減らして翌年に備えるとか、東京都に提案しています。東京都やオリンピック組織委員



会はなかなか動かないのですが、検疫所はさすがに動き出しましたね。殺虫剤の備蓄とか発生時の蚊やネズミの駆除の契約を日ペと結ぶ準備しています。オリンピックを利用してIPMやHACCPの普及、トコジラミの早期発見とか呼び掛けてほしいですね。環境整備がよくなれば我々の仕事がやりやすくなるので、絶好のチャンスと思っています。

しかし、行政はなかなか動いてくれないけれど、我々がしっかりとやっているという証だと思います。感染症予防衛生隊や害虫相談所は全国で整備されてきたし、鳥インフルや豚コレラの消毒もPCOが前面に立ってやっています。ここまで来たというのはすごいことだと思います。

(泉) 協会の活動は好きだからできるのですか？熱い気持ちがあるからですか？

(元木) この仕事をするためには1社ではできない、業界でやらなければならないと思っています。

(泉) 業界のレベルを上げて認知度を上げてビジネスを大きくして永遠に存続していけるようにするということですね。

(元木) IPMも田中先生が先頭に立って進めて法律を変えた。インフォームドコンセントも絶対に必要です。

(坂上) あれは必要ですね。うちでは複写式にして双方で保管しています。

(泉) うちでもダニやシロアリで苦労したので、すべてでやっています。

何でも受けてしまうからクレームになるんですよ。

(泉) 業界のイメージを変えるにはコマー

シャルは必要ですね。

(元木) 全国の協会員が少しずつお金を出してイメージアップすれば見返りはものすごく大きいと思いますね。会費値上げは反対されてなかなかできません。

(坂上) 業界全体の話題になりましたが、ところで社員研修はどうしていますか？

(元木) 第1火曜日に全体研修を1時間、1年間続けて技術や安全、とくに事例報告を行っています。その後の全体会議で前月の売上や利益を公表、各セクションの実施状況、各チームでQCサークルを作って実施状況や成果を報告し合っています。そのあと何かにかこつけて懇親会をやって交流しています。資格取得は、業務社員全員にペストコントロール技術者、監督者、技能師取得を、幹部候補にはペストコントロール経営塾に参加させています。これまで9名になりました。同業他社と知り合うことで視野が広くなり、終了後もネットワークを取り合っているようです。研修を受けた内容は全体研修で発表します。これは本人にとってとてもいい勉強になっています。従事者研修も、従事者研修指導者講習のスライドがありますから、全員分担でやっています。講習を受けるよりよっぽどいい勉強になります。新入社員研修は、入社前に3日間のマナー研修、日本環境衛生センターの4日間のネズミ衛生害虫の講座、入社後は同じくセンターの3日間の実習と東ペの従事者研修を受けさせています。また、技術交流会といって全社員と親しい同業者やメーカーも参加して25年

前から他社との交流を毎年続けています。

(泉) 研修は1年生から3年生が一番いいですね。5年10年経つとだめな人は何をやってもだめ、入った時が肝心ですね。新しい人が入ってこないとその組織は固まってだめになってしまいますね。

(元木) 先輩は作業の仕方を教えるんですね。我々の仕事はいかに結果を出すか、先輩の技術を使ってどうやって結果を出すか、という取り組みが必要です。現場の処理場所、設置場所を一つひとつを覚えて改善はできませんから。

(坂上) 話は変わりますが、人事評価はどうされていますか？

(元木) 独特ではありませんが、期首に各人が目標を作って上司と面談し、半期ごとに達成度を数値で評価して賞与や昇給に反映させています。そのほかに、基本行動、業務評価、業績評価の各項目を本人と第1上司、第2上司が採点して面接を経て決定します。賞罰、回覧物の閲覧状況やアルコールチェックも加点・減点しています。せっかく回覧してもなかなか読まないのです。

(坂上) 事業承継はどのようにお考えですか？

(元木) 社員にバトンタッチすると公表しています。同族の場合は遺産相続があるので、承継しやすいのですが、社員にバトンタッチするのはなかなか大変です。ひとつは債務保証をしなければならないこと。株を譲るのも難しい。時価で取得しなければならないので、業績がいいと大変な金額を用意しなければ

ばならない、そのために借金することもできないし。今、いろいろ方法を考えているところです。

(坂上) 令和の時代に突入して、残したい技術や業界の方向性についてどうお考えになりますか？

(元木) ビルの需要は限度ですね。中小飲食店や一般家屋にシフトしていくと思います。業界としてすそ野を広げることが必要です。

(泉) セルフチェック(自主点検)して問題があればすぐに出勤するという制度があると一気に需要が広がると思います。

(坂上) 創業時代から変わらないこと、こだわりは「書くこと」でしょうか？

(坂上) 元木さんを見ていると、会社として動いているのでしょうか、常に公的なことで動いているというイメージがすごくあります。そこにはきちんと会社をやっていく中で、うまくリンクさ

せて相互に取り入れながらやっているというのが一貫しています。

(元木) 皆さんの智恵を集めていいものを作って発信していきたいですね。

(泉) まわりの資産というか宝をビジネスに変えて、それをまた還元して協会のため、世のため人のためにやっているという印象があります。

(元木) 皆で協力して業界を良くしていきましょう。それがそれぞれの会社にプラスになります。

(泉) 永きにわたり日々業界のために貢献されておられる元木社長に貴重なお話を聞かせていただき誠にありがとうございました。

令和になってさらに新しい気持ちでPCO業界を皆で育てていきたいと思えます。本日はお忙しい中、誠にありがとうございました。

